

京都大学 総長 山極 壽一 先生

Special Interview

戦 後生まれとしては初となる、第26代京都大学総長に就任した山極壽一総長。世界的なゴリラ学者、霊長類学者として知られ、2014年の総長選挙の際には、教授を慕う学生らから「研究職を離れてしまうのは、世界の霊長類学の損失」と嘆願されたエピソードは有名です。総長就任2年目を迎えた現在は、京都大学の将来構想「WINDOW」を掲げ、世界水準の研究大学として“学生を第一に考えた”改革に意欲的に取り組んでいます。その熱い思いの「原点」には、どのような知的体験があったのでしょうか。学生時代の貴重なエピソードを語っていただきました。

——東京育ちの山極先生が京都大学に入学して抱かれた感想は。

高校までの学びは「予め決まっている答えにどれだけ早く近づけるか」を競うものです。大学での学修はそこがまず違います。世界には答えの見つからない、あるいは答えが複数ある問題がたくさんある。自分が得意とする学問分野だけでは解決できない問題が多いのです。

人類学などはまさにその典型です。「人間」は言語学や生物学、医学、工学などさまざまな学問から定義づけられる。そんな中で、私が京都大学に入って面白いと思ったのは、分野を超えてさまざまな対話ができるということ。違う分野の意見や考えもスムーズに吸収し、「おもしろい」という言葉で賞賛してくれるのです。

「おもしろい」とは
“共有”であり“応援”でもある

——当時、京大には「近衛ロンド」と呼ばれた人類学研究会の集まりがあり、今西錦司や伊谷純一郎、梅棹忠夫といった錚々たる研究者と学生が議論を交わせる空間がありました。

「おもしろい」は関西弁ですが、面白いとは違う。面白い、は相手に対する一つのメッセージですが、おもしろい、というのは相手と自分の共有物なんです。

そして、「おもしろい」という言葉の後には、「ほな、やってみなはれ」という言葉が続く。「俺は、お前を応援しているからな」という励ましなんです。

それが、いわゆる「ディベート」と異なることです。相手と自分のどちらの意見が正しいかを競うのではなく、お互いの意見によってお互いが変わる。それを共に体験しながら面白がるわけです。そして、元々自分たちが出した意見とは違う「新たなもの」を創り上げていく。

——それを「ダイアログ」と言う。

ダイアログはディスカッションと違って、対話の後に自分が変わっていることが成果なのです。自分が勝った、というのは成果ではない。この思想はすごいと思いました。

そこで問われるのは、「自分の考えは何か」ということ。それはお前が本当に考えたことなのか。他人のコピーはダメだ。エピソード（模倣者）なんて信用しない。そういう非常に厳しい環境でもあるのです。

ゴリラの姿に
未知なる人間の過去を見る

——先生がゴリラ研究に進もうと思われたきっかけは。

子どもの頃から「探検」が好きでした。けれども、私の学生時代は、まさに探検という未知の場所が地球上から失われつつあった時代なんです。だけど、よくよく考えてみれば、未知というのはまだたくさんある。その中で、私がいちばん未知なるものだったのが「人間」。私自身なのでね。

人間を探検するためには、人間とは違う、けれども人間とよく似たものを知らなければなりません。それは何かと言うと、「人間の過去」です。

人間は昔から現在のような身体や心を持っていたわけではない。しかし、現在に至る進化のプロセスを示す証拠はありません。それを「ミッシングリンク」と呼び、化石などを手掛かりに判断するわけですが、生の身体が分からないし、体毛や肌の色、目の色がどうだったかなんて全然分からない。昔の人間も愛を語っていたかどうか分からないでしょう。

それを知るには、いま生きていて、人間に近い動物、つまり近い過去に共通の祖先を分かち合った動物を研究することが必要で、それで私はゴリラを選んだわけです。ゴリラというのは、人間に近い類人猿の中でもいちばん「未知の」対象でしたから。

しかも、アフリカの最も奥地のジャングルに棲んでいるということで、「探検」をしたいという自分自身の欲望も満たせる。何よりも、他の人が体験しないことを通じて、世界の知を一新してみたいという気持ちがありました。

リスクに囲まれても、
一人で判断しなければ
ならない時が必ず来る。
その時のために
自分を鍛えてほしい。

だから常に私はゴリラの中に人間の過去を見ようとしてきたし、人間の中にゴリラの過去を見ようとしてきたのです。

——先生の著書(※)に、なぜ人間の目はサルや類人猿と比べて横に広く、白目の部分が大きいと言及されている個所があります。

霊長類の社会学や生態学ではフィールドワークと言って、実際に猿や類人猿と付き合いながらさまざまな知を発見していきます。私のその話も、実際にゴリラの群れの中に入って生活しているときに体験したことが元になっています。

私たちは言葉を使って会話をしていますが、言葉を使わない動物の間で生活していると、彼らは違うコミュニケーションツールを使っていることが体験できる。人類も、進化の大半は言葉を使わずにコミュニケーションを取ってきたわけで、それはこういうことだったのかということが実感できます。

熟成させた考えを蓄える
「引き出し」を持つ

——言語というと、先生は英語、フランス語のほか、アフリカではスワヒリ語も話されます。

相手や状況に対応して、引き出しをたくさん持つことが大事です。

例えばアフリカの人たちと話をすると、彼らはたくさん話を自分の中に持っていて、それをきちんと消化している。だから、一つの話から新しい話題がどんどん出て来る。対話をしていてとても面白いし、そこから学ぶことも多い。

ですから、単に専門的知識を高めればよいというものではありません。もちろん語学

力は必要ですが、その引き出しとは日本語で貯めておくものだと思います。母語で貯めておかないと、考えは熟成されません。それは重要なことだと思います。

——京都大学での自由な放任主義は「子捨て主義」と呼ばれていました。

大学院に入ってドクターコースのときに初めてアフリカに行きましたが、まさに一人でぼっぽり出された。土地の経験者と話し合い

Juichi Yamagiwa

1952年東京都生まれ。理学博士。人類学者、霊長類学者。1975年京都大学理学部卒。1977年京都大学大学院理学研究科修士課程修了。1980年同大学院理学研究科博士後期課程退学。同年日本学術振興会奨励研究員。1983年財団法人日本モンキーセンターリサーチフェロー。2002年京都大学大学院理学研究科教授。2011年同大学院理学研究科長・理学部長。2012年京都大学経営協議会委員。2014年10月から現職。



ながら、調査許可から村人との交渉、身の安全の確保、それから実際に森を歩く企画まですべて自分でやらないといけな。そういうことを体験しました。

でも、それで大きな自信も湧いた。だから、総長になった今、「おもしろチャレンジ」という、海外でのフィールドワークや調査研究を自分自身で計画し、一人で行ってみる(グループでも可)プロジェクトを始めたのもその一環です。これはある意味、「子捨て主義」なんですよ。

——ただ、先生の調査の場合は本当に命がけでしたね。バッファローに追いかけて半日、木から降りられなかったとか。

そうですね(笑)、これは結果論ですけども、その中で一つ間違えてしまうと、恐らく今ここで生きていないでしょう。

現代はまた、まったく別のリスクに囲まれているのかも知れませんが、それを一人で判断しなくてはならない時が必ずやってきます。その時のために、ぜひ若い皆さんも今から、いろいろな意味で自分を鍛えてほしいと思います。

* * *
(※)山極壽一「京大式 おもしろ勉強法」(朝日新聞出版)p.120を参照